藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

頭ケ島教会（上）

～上五島・長崎巡礼⑧～

七月三十一日、下松の自宅を出たのは朝六時四十分、高速道路を通って佐世保港に。午後零時四十分発のフェリーで上五島・中通島の有川港に着いたのは三時半であった。

そして最初に訪れたのが頭ケ島教会、国の重要文化財でもある。

頭ケ島は五島列島で二番目に大きな中通島の北東端にある面積二平方キロ弱の小島で、幕末まで無人島であった。

そこに有川港に近い鯛ノ浦の隠れキリシタンが移り住んだのは一八六九年（M2）のことである。

長崎浦上村の隠れキリシタンが信仰を表明したのが江戸末期の一八六五年。この「信徒発見」と呼ばれる事件が、それまで平穏に生活していた隠れキリシタンの新たな迫害を生むこととなった。三千四百人弱の全国各地への流刑。

鯛ノ浦地区の隠れキリシタンの一部は迫害を逃れてさらにへき地の無人島だった頭ケ島に移り住んだのである。

翌年には鯛ノ浦で六人のキリシタンが斬り殺される事件も起きている。

それから三年後の一八七三年（M6）、ようやくキリシタン禁止令が廃止された。

頭ケ島に最初の教会が建てられたのは八七年（M20）、現在の石造りの教会は一九一七年（T6）に建てられたものである。

長崎・外海（そとめ）地方から開拓移民として移り住み、へき地で極めて貧しい生活を送りながら信仰を守り続けた隠れキリシタン。禁止令が廃止されたからといって貧しい生活から解放されたわけではない。にもかかわらず信仰を第一とする彼らは、自分たちの教会を建てるために献身的な労働奉仕や資金集めに協力を惜しまなかったという。

頭ケ島で産出される石で七年の歳月をかけて完成させた今の頭ケ島教会は、外観が石造りのため重厚な感じを受けたが、聖堂内のその優しい美しさに息をのんだ。

天井は舟底を思わせる折り上げ式と呼ばれるもので、堂内全体は薄いブルーを基調とし、上品である。柱などあちこちに野バラがあしらわれ、優しい雰囲気が漂う。午後の陽差しが花模様のステンドグラスを通して堂内に差し込む。

しかし、そこには人影は全くない。信仰の自由が保障され、経済的にも豊かになるにつれ、逆に信徒数は大幅に減っていった。これは頭ケ島教会に限らず、世界の先進国に共通して言えることで、若者の教会離れ、信徒数の減少が目立つ。

旅に出る前に調べたところ、上五島の二十九の教会のうち神父が常駐しているのは十教会だけで、残りは巡回教会。頭ケ島教会もその一つで、ミサは月に二回、鯛ノ浦教会の神父が来て行われているという。

隠れキリシタンの人たちが命をかけて守ってきた信仰、頭ケ島教会はその信仰の遺産である国の重要文化財に指定されるのも悪くはないが、教会は生きた信仰の場であり、そこに集う信徒が少ないのは寂しい限りである。

それにしても隠れキリシタンの信仰深さはどこからきたのだろうかと考えながらひざまづき、祈りを捧げた。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

全国でも珍しい石造りの教会

教会建築史上でも珍しい折り上げ式天井